

来日前不安に関する理論的・実証的研究：eラーニングによる来日前日本語学習教材の有効性

早瀬，郁子

<https://doi.org/10.15017/1931981>

出版情報：九州大学，2017，博士（学術），課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	早瀬 郁子			
論文名	来日前不安に関する理論的・実証的研究 —eラーニングによる来日前日本語学習教材の有効性—			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	李 相穆
	副査	九州大学	教授	松永 典子
	副査	九州大学	教授	井上 奈良彦
	副査	九州大学	教授	松村 瑞子
	副査	九州大学	准教授	志水 俊広

論文審査の結果の要旨

本研究は、情意要因である「言語不安」が、第二言語習得に最も影響力を与え学習意欲を阻害するとも言われていることから、第二言語不安の中でもこれまでほとんど扱われることのなかった「来日前」の不安に焦点を当てる。まず、その「来日前不安」という新しい概念を定義しその不安因子の分析を試みる。さらに、その来日前不安を軽減させるために、eラーニングを活用した「来日前日本語学習教材」の設計・開発・配信・評価を行い、その教材がどの程度学生の不安を軽減させ、さらには学習意欲を高めることができるかを検証することが目的である。

これまで、日本語学習における第二言語不安として、日本語不安尺度が作成され分析が行われているが、「来日前」という状況での不安要因は明らかにされていない。さらに、eラーニングによる来日前日本語学習教材はあるものの、不安に焦点を当てて作られたものはない。したがって、(1)「来日前不安」とは何か、(2) 来日前不安要因とはどのようなものがあるか、(3) 不安軽減を目指したeラーニングによる「来日前日本語学習教材」とはどんなものか、(4) 本研究で開発したeラーニング学習教材がどのような効果をもたらすか、という4つの研究課題を設定する。

本論は全6章で構成される。第1章では、本研究の背景と目的を述べ、第2章では、先行研究を踏まえ上記のような本研究の研究課題を設定する。第3章では、「来日前不安尺度」を独自に作成し、「来日前不安」の定義と来日前不安因子の抽出を行う。第4章では、不安軽減のためのeラーニングによる「来日前日本語学習教材」の意義と、設計し開発するまでを述べる。第5章では、開発した学習教材を配信し、アンケートとモニタリングを行い教材の有効性を検証する。第6章は総合的考察として、本研究の成果とまとめ、および今後の課題について述べる。

来日前不安尺度によって、「来日前不安」は「情報不足による不安」「特性不安」「新しい環境への生活適応不安」「日本語能力に対する不安」の4要因が検出され、来日前不安が第二言語不安である状況特定の不安のみならず、特性不安や状態不安など様々な不安要因が絡み合っていることを解明する。さらに、その不安因子軽減のために設計・開発した教材が来日前不安4要因の軽減に有効であったこと、学習意欲を喚起できたこと、さらに、「学修観」という視点から

個々に焦点を当てたサポート体制を充実させることで学生の不安が軽減したことなどをまとめる。

本研究が、「来日前不安」という新しい概念を定義しその不安要因を検出したこと、今回開発した e ラーニングによる「来日前日本語学習教材」が不安軽減に有効であったこと、「学修観」の視点からサポートの充実を図ることなど、e ラーニングによる日本語教育の分野の新しい貢献になると考える。

来日前の不安の軽減は、来日後の生活への適応、学習へも良い効果をもたらすものと推測する。本研究が目指す、日本語不安尺度を基盤に来日前不安尺度を加えた分析研究、およびその不安軽減のための日本語学習教材の開発の意義は大きい。また、来日前不安というものが、第二言語不安である状況特定の不安のみならず、様々な不安要因が絡み合っていること、来日直後の留学生の動機づけや自己効力感を測定し、それぞれのデータ分析もさることながら、それらが来日前不安や日本語不安とどのような相関関係を持っているかも明らかにしたことは評価できる。よって、本論文は博士（学術）の学位に値すると認める。